

平成16年度岩手県立総合教育センター

# 高等学校の学習指導の改善に関する研究

- 指導に生かす評価の工夫をとおして -

(第1報)

## 研究協力校

岩手県立花北青雲高等学校

岩手県立花巻南高等学校

## 研究協力員

岩手県立水沢高等学校 教諭 石川 克紀

岩手県立盛岡北高等学校 教諭 高橋 良一

岩手県立花巻北高等学校 教諭 木村 基

岩手県立盛岡北高等学校 教諭 舟山 美知

教科領域教育室

夏井 敬雄 佐藤 政則

遠藤 毅 中館 豊

## 《 目次 》

研究の目的	1
研究の方向性	1
研究の計画	1
本年度の研究の内容と方法	1
1 研究の内容	1
2 研究の方法	2
3 研究協力校	2
研究結果の分析と考察	2
1 高等学校の学習指導に関する基本的な考え方	2
(1) 岩手県における評価のとらえ方	2
(2) 評価と指導改善に関する基本的な考え方	4
2 指導に生かす評価に関する実態調査	5
(1) 実態調査の概要	5
(2) 実態調査の結果	5
(3) 実態調査の結果のまとめ	7
3 高等学校の学習指導に関する推進構想	8
4 指導に生かす評価に関する推進試案	10
5 教科ごとの指導と評価の計画	11
(1) 国語科の指導と評価の計画	12
(2) 地歴・公民科の指導と評価の計画	14
(3) 数学科の指導と評価の計画	16
(4) 外国語科の指導と評価の計画	18
6 高等学校の学習指導の改善に関する研究のまとめ	20
(1) 成果	20
(2) 課題	20
研究のまとめ	20
1 研究の成果	20
2 今後の課題	20

<おわりに>

【引用文献】

【参考文献】

【参考Webページ】

## 研究の目的

教育課程審議会「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」(平成12年)では、高等学校においては目標に準拠した評価を一層進めることを求めている。また、「高等学校生徒指導要録の改善等について(通知)」(平成13年)は、各教科・科目の評定については、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の四つの観点を踏まえて評価を行うことの重要性を示している。このことを踏まえて、生徒の学習の過程や成果を適切にとらえ、意欲を高めて学ぶ喜びを得ることができるよう、指導の改善を行う必要があると考える。そしてこのことは、変化が激しい現代社会で欠かすことのできない「生きる力」の育成に結び付いていくものである。

高等学校においてはこれまでも絶対評価が行われてきたものの、教科・科目において育成しなければならない資質や能力のとらえ方が曖昧であるなど、いわゆる目標に準拠した評価が適切に行われていない実態がある。また、評価結果が十分に指導改善に結び付いているとは言い難い。

このような状況を改善するためには、高等学校において育成すべき資質や能力を明らかにし、それが身に付いているかどうかを適切にとらえる評価を工夫し、その評価結果を指導に生かすことが必要である。

そこで、この研究は指導に生かす評価を工夫し、学習指導の過程における評価を意図的に進めることにより、高等学校の学習指導の在り方を明らかにし、指導の改善に役立てようとするものである。

## 研究の方向性

高等学校の学習指導において「生きる力」の育成、つまりは生徒の学力向上を図るために、指導に生かす評価を工夫し、学習指導の過程における評価を意図的に進めるための具体的な指導方法を提案することとする。

## 研究の計画

この研究は、平成15年から平成17年にわたる3年次研究である。

### 第1年次(平成15年度)

外国語科における基本的な考え方の検討、基本構想の立案、実態調査の実施、学習指導の試案の作成

### 第2年次(平成16年度)

外国語科 - 学習指導の試案に基づく指導と評価の計画の作成、授業実践、授業実践の分析と考察、研究のまとめ

国語、地歴・公民、数学科 - 基本的な考え方の検討、実態調査、推進構想の立案、推進試案の作成、各教科の指導と評価の計画の作成

### 第3年次(平成17年度)

指導と評価の計画に基づく授業実践、授業実践の分析と考察、研究のまとめ

## 本年度の研究の内容と方法

### 1 研究の内容

#### (1) 高等学校の学習指導に関する基本的な考え方の検討

岩手県教育委員会等の方針に基づいて学習指導に関する基本的な考え方を検討する。

#### (2) 指導に生かす評価に関する実態調査の実施及び分析・考察

高等学校教員の評価に関する意識と取り組みの実態を調査し、授業改善の課題を明確にする。

#### (3) 高等学校の学習指導に関する推進構想の立案

基本的な評価の考え方や調査結果を踏まえて推進構想を立案する。

#### (4) 指導に生かす評価に関する推進試案の作成

推進構想に基づいて指導に生かす評価に関する推進試案を作成する。

- (5) 教科ごとの指導と評価の計画の作成  
推進試案に基づいて教科ごとに指導と評価の計画を作成する。
- (6) 高等学校の学習指導の改善に関する研究のまとめ  
本年度明らかになったことについて成果と課題をまとめる。

## 2 研究の方法

- (1) 文献法  
主題にかかわる先行研究や文献等を参考にして指導に生かす評価の在り方を検討する。
- (2) 質問紙法  
高等学校教員の評価に関する意識と取り組みの実態を質問紙によって調査する。

## 3 研究協力校

岩手県立花北青雲高等学校 岩手県立花巻南高等学校

### 研究結果の分析と考察

#### 1 高等学校の学習指導に関する基本的な考え方

##### (1) 岩手県における評価のとらえ方

前述の教育課程審議会の答申や通知を受けて、岩手における評価の在り方を平成15年3月に岩手県教育委員会「学校教育指針」のなかで示している。要約したものを下記に示していく。

##### ア 新学習指導要領に対応した評価の基本的な考え方

###### (ア) 平成11年3月 新高等学校学習指導要領告示

完全学校週5日制のもと、基礎的・基本的な内容の確実な習得、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成することを基本的なねらいとする。

###### (イ) 平成12年12月 教育課程審議会「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」答申

###### 【評価についての基本的な考え方】

- ・目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）を一層重視し、観点別学習状況の評価を基本とすること。
- ・個人内評価を一層充実すること。
- ・目標に準拠した評価及び個人内評価を基本とし、集団に準拠した評価（いわゆる相対評価）については目的に応じて指導に生かすこと。

###### (ウ) 平成13年4月「小学校児童指導要録、中学校生徒指導要録、高等学校生徒指導要録、中等教育学校生徒指導要録並びに盲学校、聾学校及び養護学校の小学部児童指導要録、中学部生徒指導要録並びに高等部生徒指導要録の改善について（通知）」

指導要録の改善通知の内容

###### 【各教科・科目の評定】

- ・学習指導要領に示す各教科・科目の目標に照らして、その実現状況を総括的に評価し、5段階で表示すること。
- ・「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の四つの観点による評価を十分に踏まえながら評定を行うこと。
- ・指導要録の改善通知に示した各教科の評価の観点を十分に踏まえ、教科・科目のねらい・特性を勘案して、具体的な評価規準を設定するなどの評価の工夫・改善を図ること。

イ 目標に準拠した評価とは

教科・科目の学習指導等によって生徒がどの程度、その教科・科目の目標を実現したかを評価するもの。

ウ 目標に準拠した評価を行うために

- (ア) 学習指導のねらいが明確になっていること。
- (イ) 学習指導のねらいが実現されたというのはどのような状態になることかが具体的に想定されていること。

エ 目標に準拠した評価における評価規準とは

- (ア) 規準 (criterion)  
「何を評価するのか」という質的な判断の根拠。教育目標を評価目的により、文脈に従った具体的な目標に読みかえたり、具体的な行動で記述する。
- (イ) 基準 (standard)  
「どの程度であるのか」という量的な判断の根拠。程度を示す尺度である数値や水準を示す記述を用いて表現する。(平成16年度より「具体の評価規準」で統一)

オ 評価規準の設定、評価方法の工夫等について

国立教育政策研究所の研究開発報告を参考にして、各学校においては、次のことを行う。

- (1) 各学校における単元(題材)ごとの評価規準等を設定すること。
- (2) ペーパーテスト等に偏重しない評価方法等の工夫を行うこと。
- (3) 生徒や保護者への評価情報の適切な提供など評価の信頼性を高めるよう努力すること。

カ 各学校で評価規準の作成や評価方法を工夫する上での留意事項

- (ア) 自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを含めて生徒の学習状況を適切に評価できるようにすること。
- (イ) 指導に生かす評価を充実させること。
- (ウ) 教員にとって過大な負担とならず、評価の改善に生かすことができるようにすること。
- (エ) 学校における評価の研究や実践の成果を生かすこと。
- (オ) 保護者にとっても生徒にとっても理解しやすい表現になるようにすること。

[ 上記(ア)～(オ)の説明 ]

- (ア) 知識や技能の評価だけにとどまるのではなく、思考力、判断力、表現力や自ら学ぶ意欲、態度などを含めて、学習指導要領の目標に照らして、生徒の学習の到達度を観点別学習状況の評価を基本として適切に評価する必要があることを示している。
- (イ) 指導と評価を別物としてではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させる必要性を示している。
- (ウ) 評価結果の信頼性を追求するあまりに、あまりにも細部にわたる評価規準を設定したり、常に多様な評価方法を組み合わせたりすることを求めることは、教員に過大な負担を課すことにつながり、実際に活用できるものとならない危険性があることを示している。
- (エ) 高等学校では、従来からいわゆる絶対評価が導入されており、一定の研究や実践が蓄積されていることが考えられる。これらの成果と経験を生かしていくことを求めている。
- (オ) 保護者や生徒に説明し、共通理解を図っていくことが重要であり、評価規準の設定等にあたっては、保護者や生徒にとっても分かりやすく、理解しやすくすることに努めるべきことを示している。

これらのことを踏まえ、評価方法の特徴を表にまとめたのが下の【表1】である。

【表1】評価方法の特徴

評価方法	観点	関心・意欲 ・態度	思考・判断	技能・表現		知識・理解
				(1)	(2)	
観察法 (行動・発言・発表・実技)						
作品法 (ノート・プリント・作品)						
評定法 (評定尺度法・序列法)						
自己評価・相互評価 (自己評価票・自由記述)						
テスト法 (ペーパーテスト)						

(注) : 最も適している方法 : 適している方法 : あまり適さない方法  
 技能・表現 (1)読み・書き・資料活用など (2)表現・実験・運動技能など

(2) 評価と指導改善に関する基本的な考え方

私たち教師は、定期テスト等を実施することにより、生徒の学習状況を評価する。そして、この評価を通して、生徒の学習の到達度を把握し、授業改善の手掛かりを得ている。こうした評価の基本的な考え方として、教育課程審議会答申（平成12年12月）では「これからの評価の基本的な考え方」について、次の5点をあげている。

**学力と評価**  
 学力については、知識の量のみでとらえるのではなく、学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容を確実に身に付けることはもとより、それにとどまることなく、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」がはぐくまれているかどうかによってとらえる必要がある。

**目標に準拠した評価及び個人内評価の重視**  
 これからの評価においては、観点別学習状況の評価を基本とした現行の評価方法を発展させ、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）を一層重視するとともに、児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを評価するため、個人内評価を工夫することが重要である。

**指導と評価の一体化**  
 学校の教育活動は、計画、実践、評価という一連の活動が繰り返されながら展開されるものであり、指導と評価の一体化（目標とかけ離れてはいけない）を図るとともに、学習指導の過程における評価の工夫を進めることが重要である。また、評価が児童生徒の学習の改善に生かされるよう、日常的に児童生徒や保護者に学習の評価を十分に説明していくことが大切である。

**評価方法の工夫改善**  
 評価に当たっては、教育活動の特質や評価の目的等に応じ、評価の方法、場面、時期などを工夫し、児童生徒の成長の状況を総合的に評価することが重要である。

**学校全体としての取組**  
 評価活動を充実するためには、各学校において、評価の方針、方法、体制などについて、校長のリーダーシップの下、教員間の共通理解を図り、一体となって取り組むことが不可欠である。また、各教員が、評価についての専門的力を高めるため、自己研鑽に努めたり、校内研究・研修を実施することなどが重要である。

このように、目標に準拠した評価（絶対評価）を一層重視し、これまで、評定については集団に準拠した評価（相対評価）によることを基本としてきた小学校・中学校においても、絶対評価による評定に改めることとしている。これは、学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容を生徒一人一人が確実に習得したかどうかを的確に把握し、指導方法等の改善に生かすことが一層重要となっているからである。

## 2 指導に生かす評価に関する実態調査

### (1) 実態調査の概要

この調査は、高等学校教員の評価に関する意識や取り組みの実態を把握し、評価の工夫による授業改善をする上での課題を明らかにすることを目的に実施したものである。調査期間は平成16年7月6日～8月27日、調査対象者は基本研修講座のために来所した高等学校教員292名である。

【表2】はその調査のねらいと内容である。

【表2】指導に生かす評価に関する調査のねらいと内容

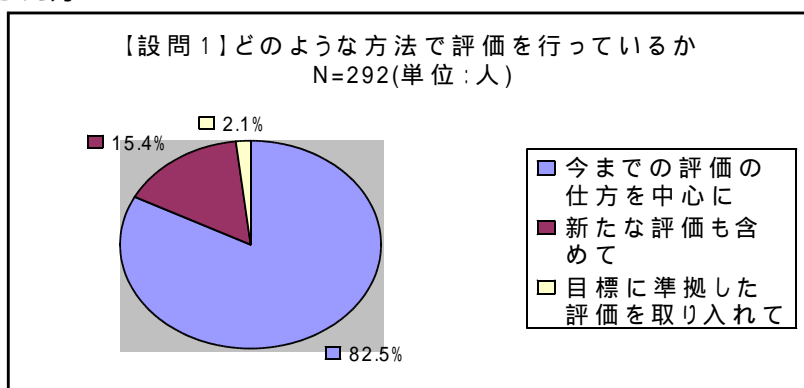
設問のねらい	設問番号と内容	分類の観点
学習指導における評価のとらえ方 ・「どのように」という問いに対する答え方により、評価をどうとらえているかを把握する。	【設問1】 あなたは、教科の学習指導において、どのように評価を行っていますか。お答えください。(自由に記述願います)	ア 今までの評価の仕方を中心に イ 新たな評価の仕方も含めて ウ 目標に準拠した評価を取り入れて
評価の生かし方 ・評価の生かし方の現状を明らかにする。	【設問2】 あなたは、教科の学習指導を行うときに、評価をどのように生かしていますか。(複数回答)	ア 生徒の意欲付けに イ 指導の改善に ウ 評定に エ 活用していない オ 分からない
評価の難しさ ・評価についての現実と理想のギャップを明らかにする。	【設問3】 あなたが教科の学習指導において評価するとき、難しいと感じていることはどのようなことですか。(複数回答)	ア 評価規準の不明確さ イ 評価の方法 ウ 評価の活用の仕方 エ その他
目標に準拠した評価の認知度(1) ・目標に準拠した評価をどのくらいの教師が知っているかを明らかにする。	【設問4】 「目標に準拠した評価」という用語を知っていますか。	ア 知っている イ 知らない
目標に準拠した評価の認知度(2) ・目標に準拠した評価の内容を理解しているかを明らかにする。	【設問5】 設問4において、アと回答した方は、内容について知っていることを記述してください。	
評価の工夫 ・評価をする上でどんな工夫をしているかを明らかにする。 ・目標に準拠した評価を行う上での接点を明らかにする。	【設問6】 あなたが、評価をする上で、工夫している点をあげてください。(自由に記述願います)	

### (2) 実態調査の結果

#### ア 学習指導における評価のとらえ方

【図1】の「今までの評価の仕方」とは、定期考査や小テスト、提出物等により、生徒が獲得した得点を評価する方法である。

「新たな評価も含めて」とは、生徒の関心・意欲・態度等の評価の観点のある



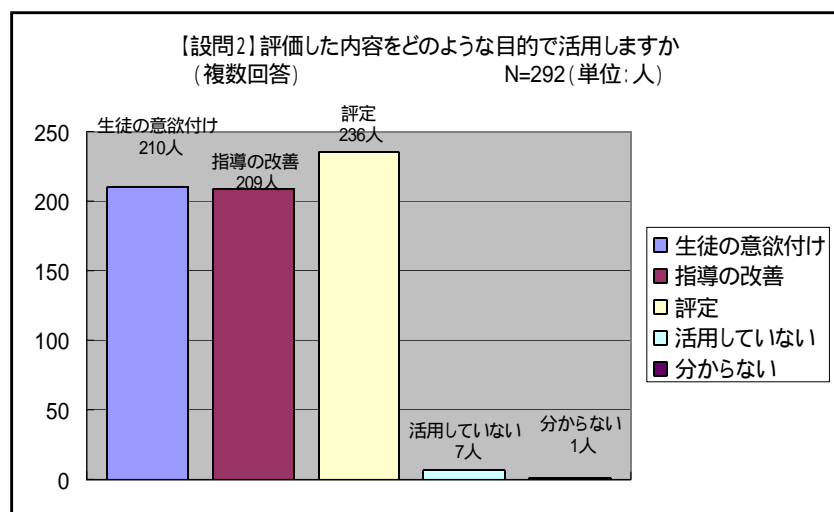
程度意識した方法と回答した 【図1】評価をどのような方法で行っているかの状況

ものである。この回答から、今までの高等学校で行っている評価の仕方を継続して行っている

割合（82.5%）が大きく、「新たな評価を含めて」や「目標に準拠した評価を取り入れて」と評価を工夫・改善しようとしている割合は少ないことが分かる。

### イ 評価の生かし方

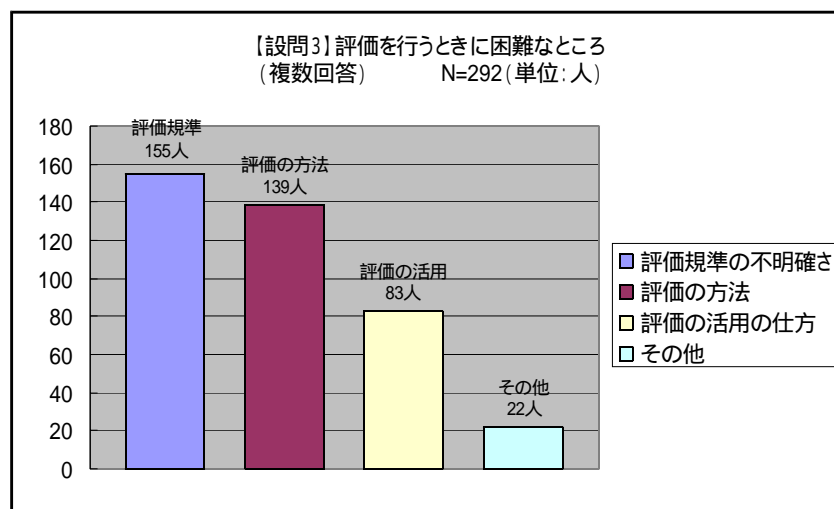
【図2】は、評価した内容をどのような目的で活用するかを聞いたものだが、提示した三つの回答項目とも全回答者数の7割前後の回答があり、評価を意識した指導が行われているものと考えられる。特に評価を、評定を出すことに活用するという意識（236人、全回答者数の81.5%）が強いことが分かる。



【図2】評価の生かし方

### ウ 評価の難しさ

【図3】は、評価を行うときに困難なところをまとめたものである。回答者の半数以上が「評価規準の不明確さ」を困難な点として回答している。さらに、「評価の方法」についても半数近くの回答者が難しいと感じている。評価を行うことに困難な点は感じながらも評価活動を行っている姿が浮かんでくる。【表4】は、



【図3】評価の難しさ

「その他」の記述を示している。

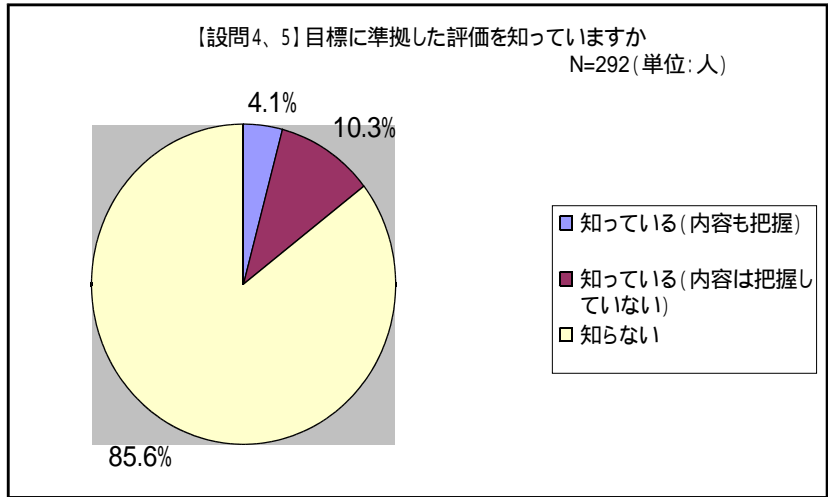
【表4】評価の難しさの「その他」の記述の例

回答者	その他の記述の例
1	数人で1科目を評価する時、考え方が異なり結果的に強気の先生に引っ張られる。
2	同教科を複数で担当しているので統一した評価が難しい。
3	絶対評価なのに、平均点の目安が設定されていて、それに近づけなければならない。
4	目に見えない(成果として表れない)努力を見落としてしまっていそうで心配である。
5	座学と違い、作品が中心となる科目の評価規準。
6	授業中静かだが発言しない生徒と授業中うるさいがよく発言する生徒の評価をどうするか。
7	生徒の意欲づけに活用する方法。
8	努力をいかに適正に評価へ組み込むか。
9	提出物を出さない者、合格しない者がいること。
10	内規の平均点に合わせること。
11	評価規準が不明確。進路等への活用。
12	進度別の指導における評価。
13	授業中の姿勢、普段とテストの結果との違い。
14	テストで期待通りの平均点にならないとき。



エ 目標に準拠した評価の認知度

【図4】は「目標に準拠した評価」という用語を知っているかについての回答結果のグラフである。実に85.6% (250人)の割合で知らないと回答した。そして、知っている回答した教員のうち【設問5】の具体的な内容を記述したものをみると、知っている回答したもの内容は把握していない割合が全回答数



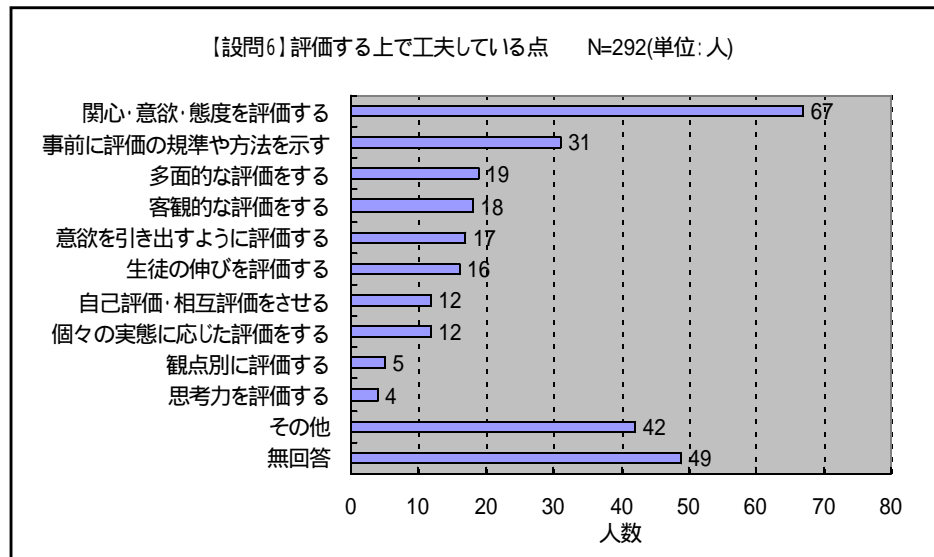
【図4】「目標に準拠した評価」の認知度

の10.3%であった。知らない回答した数と合わせると、実に95.9% (280人)の回答者が目標に準拠した評価を把握していないことが分かる。

オ 評価の工夫

評価する上で工夫している点について記述したものを分類したものが【図5】である。

いろいろな角度から生徒を評価しようと努力、工夫していることが分かる。特に、「関心・意欲・態度」を評価しようと考えている回答



【図5】評価の工夫

が67人と最も多く、「知識・理解」や「技能・表現」だけに偏らない評価をしようとする姿勢が感じられる。

(3) 実態調査の結果のまとめ

調査結果から、評価に関する教員の意識や実態が下のようになっている。

- ・評価を工夫したいと考えている者、または工夫している者もいるが、今まで高等学校で行われている評価の仕方で行っている者が大多数である。
- ・評価が評定を出すためになされている傾向が強く、授業のねらいが成果に結び付いたかどうかを確認し、指導に生かすために評価がなされているという考えが定着していない。
- ・評価した内容を生徒の意欲付けや指導の改善に役立てたいと感じているものの、どのように評価の計画を進めていけばよいのか分からない。
- ・そのために、学習指導要領の目標を実現しているかどうかを把握するための評価の観点ごとに評価規準を作成して計画的に評価を行う「目標に準拠した評価」は考えられていないし、その内容や言葉さえも知らない教員が圧倒的に多い。

### 3 高等学校の学習指導に関する推進構想

指導に生かす評価をどのように学校の中で推進していけばよいのか。これまで述べてきた評価の考え方や調査結果を踏まえて、本研究の推進の流れを以下(1)から(4)で述べる。この推進の流れを図にまとめたのが次頁【図6】である。

#### (1) 評価に関する教員と生徒の実態

高等学校の授業では教師側から生徒に明確な学習目標が示されないまま、学習指導が行われている実態が多く見られる。また、評価が評定を出すためになされている傾向が強く、生徒が授業でどのような能力を身に付けたのかという成果が学習指導の目標に即して確認されていない。そのため、生徒は学習指導の目標を十分に理解しないままに授業を受け、自己の能力がどのように授業をとおして培われているかが分かっていない。

#### (2) 目標に準拠した評価の導入と実施

生徒一人一人の進歩の状況や目標の実現状況を的確に把握し、基礎・基本の確実な習得を図るためには、これまでどおりの絶対評価では不十分である。そこで、授業内容を丁寧に見直し、生徒がどれだけ指導内容を理解しているかを学習指導要領に示している四観点に即して見ていくために、目標に準拠した評価を行うことが必要である。

この目標に準拠した評価を行うためには目標を明確にするという作業が不可欠である。具体的には学習指導要領の指導目標や指導事項等を評価の観点に照らしつつ、年間指導計画に配置していかなくてはならない。小・中学校が目標に準拠した評価によることになったことにより、高等学校でも、評価の観点をきちんと踏まえた指導を行うことが緊急の課題である。

学習指導要領に基づいて国立教育政策研究所が示した評価規準を土台としながら、最終的に単元及び1単位時間ごとの指導目標及び評価規準を各学校で作成しなくてはならない。

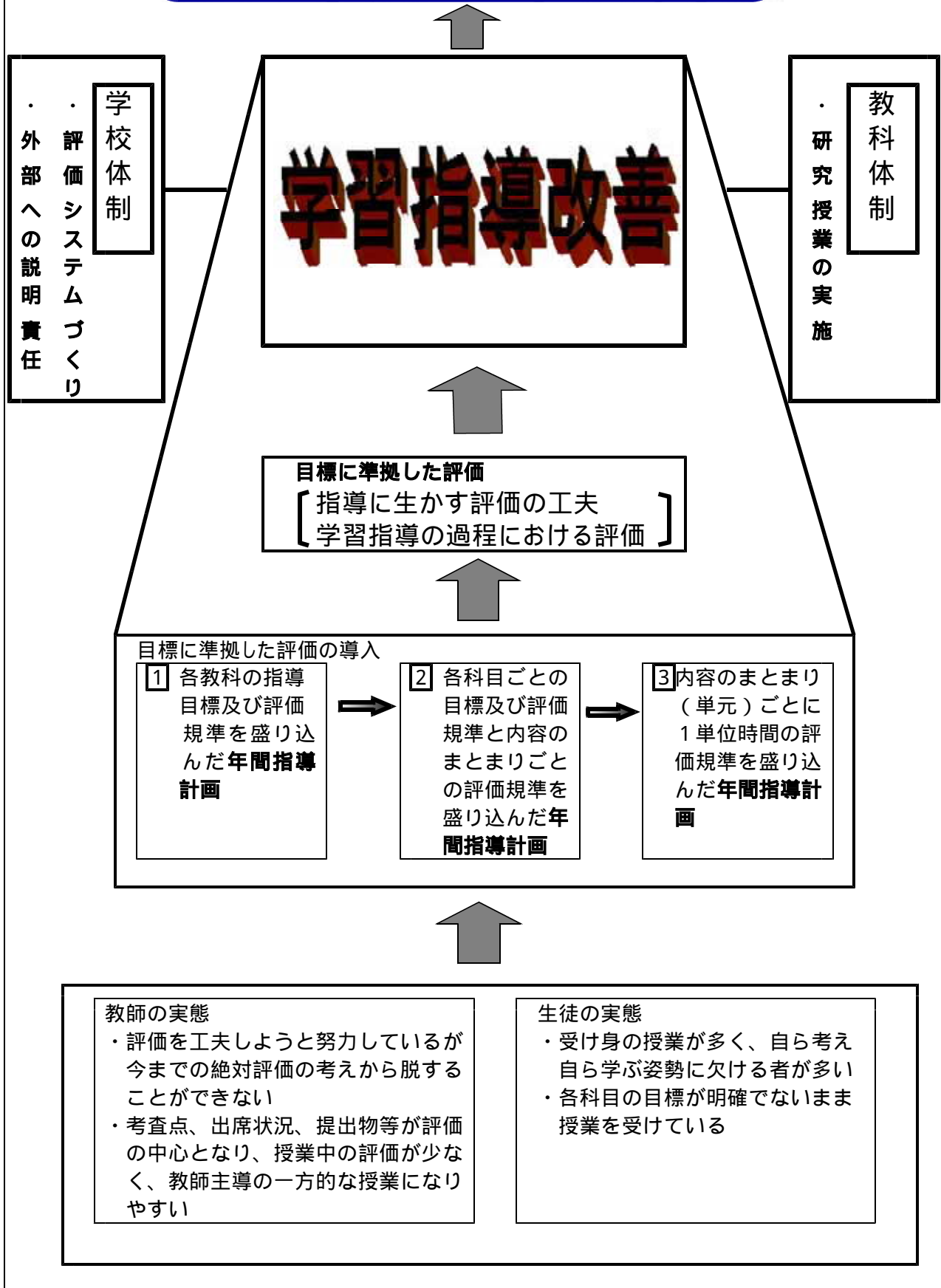
このような指導目標及び評価規準の作成は教員にとって過度の負担となりかねない。そこで、教員の負担を軽減し、作成した評価規準が授業で実際に活用できるように、目標に準拠した評価を充実させていくことが肝要である。この目標に準拠した評価を充実させることが学習指導を大きく改善していくことになる。

教員に過大な負担がかからないように、3段階のステップを踏んで着実に目標に準拠した評価の導入する手順を表しているのが、【図6】中央部分① ② ③である。これは「年間指導計画・ ・ 」であり、指導に生かす評価の推進試案として、11頁で詳しく説明する。

#### (3) 学校体制と教科体制の整備

高等学校の評定については、学習指導要領に示す各教科・科目の目標に基づき、学校が地域や生徒の実態に即して設定した当該教科・科目の目標と照らして判断することとなっている。すなわち、学校がどのような学習の実現状況を目指すこととするのかによって評定の意味、その前提となる観点別評価も異なる場合がある。学校間でなぜ評価規準が異なるかについては、各学校が、地域や生徒の実態に即してどのように目標や内容を設定したかを含めて生徒や保護者等に説明する必要がある。この説明責任を果たす意味においても、学校としては評価のシステムを構築し、各教科においては研究授業を通して、指導と評価の計画を検証・改善していかなくてはならない。

# 生きる力・学力向上



【図6】高等学校の学習指導に関する推進構想図

#### 4 指導に生かす評価に関する推進試案

このような推進構想を踏まえ、指導に生かす評価に関する推進試案を次のようにまとめた。

概略は次のとおりである。年度ごとに作成している年間指導計画を次の3段階で作成していくこととする。内容は、教科ごとの「年間指導計画」、科目ごとの「年間指導計画」、科目の内容のまとまり(単元)ごとの「年間指導計画」とし、学習指導の目標と内容及び評価規準等を盛り込んだものとする。以下、それぞれの年間指導計画の内容等を示していく。

##### (1) 年間指導計画 (学校全体での推進)

「年間指導計画」は、指導する教科ごとにまとめたものである。教科としての目標及び評価規準を記し、教科としてどのような立場で指導するのか生徒や外部(保護者、地域等)に示す。そして、どの学年でどの科目を指導するのか、その科目の目標は何であるのかを記していく。(備考等には、クラスにより選択学科により学習する科目の違いを記載する。)このような計画を教科ごとに数枚に収める。学校では指導する全科目をひとまとめにしておくことにより、学校としてどのようなスタンスで指導していくのかを生徒及び外部に公表していく資料とする。この「年間指導計画」の作成例を【補充資料1-1】の数学科の例で示した。

##### (2) 年間指導計画 (各教科での推進)

(1)の「年間指導計画」をうけて、各教科のなかの科目ごとに指導計画を記していく。まず、科目の目標及び評価規準を示し、指導する内容のまとまり(単元)での目標及びおおまかな内容と評価規準を記述する。そして、可能な限り指導予定時数等も記載する部分を設定しておく。この「年間指導計画」により、各教科の指導のスタンスを生徒、外部へ示していく。この「年間指導計画」の作成例を【補充資料1-2】の数学科・数学の例で示した。

##### (3) 年間指導計画 (各科目での推進)

(1)(2)をうけて、各科目の内容のまとまり(単元)ごとに年間指導計画を作成する。ここでは、内容のまとまりごとに指導内容や配当時間、小単元または1単位時間での評価規準を明示して生徒、保護者等外部へ指導内容を公表していくよう作成する。ただし、(3)については、年度当初に一斉に作成することを目標とはせず、実際に指導する期間よりも前に作成を終えるといった柔軟な態度で作成する。そのことにより、今までの授業準備と平行して修正がしやすいよう配慮する。この計画を一年間進めて、年度末にはすべて指導した内容が揃い説明できるようにする。そして、数年間で年間指導計画を整えていけば、次年度に修正する部分がどこであるのか見通しが立つと思われる。そのときは、年度の終わりに作成を終える予定を、年度初めには計画を提出する体制へと移行することも可能であると考え。この「年間指導計画」の作成例を【補充資料1-3】の数学科「数学(1)方程式と不等式」の例で示した。

以上(1)~(3)の要領を進めていく推進試案をまとめたものが次頁【図7】である。この推進試案を進めて行くにあたっては、国立教育政策研究所において「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料(高等学校)-評価規準、評価方法の研究開発(報告)2004年6月18日」を参考にする。この国立教育政策研究所の報告では、各教科の必履修科目について扱っており、他の科目については、それを参考に指導計画作成に取り組むものとする。(WebページURL <http://www.nier.go.jp/kaihatsu/kou-sankousiryuu/html/index.htm>) また、評価の観点(四観点)は、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」であるが、国語科については「関心・意欲・態度」「話す・聞く」「書く」「読む」「知識・理解」の五観点となり、外国語科については、「関心・意欲・態度」「表現」「理解」「言語や文化についての知識・理解」となっている。

1 各教科の指導目標及び評価規準を盛り込んだ年間指導計画



年度岩手県立 高等学校 年間指導計画			
教科	目 標		
評価規準			
関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
各学年での指導科目と目標			
< 1 学年 >			
科目	単位数	目 標	備 考
< 2 学年 >			
( 中 略 )			
< 3 学年 >			

作成のための留意点

- ・教科としての目標、評価規準を明確に示した上で、指導する科目ごとに目標や単位数、指導するクラス等を示す。
- ・学年ごとにまとめて、一つの教科での指導計画を大まかに示したものにす。
- ・各教科でまとめたものを一つにまとめ大きく学校としての年間指導計画と位置付けて綴りを作成する。
- ・可能な限り、年度当初に作成するよう努める。

2 各科目ごとの目標及び評価規準と内容のまとめ(単元)ごとの評価規準を盛り込んだ年間指導計画



年度岩手県立 高等学校 年間指導計画 (教科)				
科 目	目 標			
使用教科書	使用副教材			
評価規準				
関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	
内容のまとめ(単元)ごとの内容と評価規準				
内容のまとめ(単元名)				
内容				
評価の観点	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
指導予定時間				
内容のまとめ(単元名)				
内容				

作成のための留意点

- ・年間指導計画 では、一つの教科の各科目の目標、評価規準及び科目内の内容のまとめ(単元)を示していく。
- ・可能なならば、内容のまとめ(単元)ごとの評価規準も示していく。
- ・使用教科書、使用副教材(問題集等)等も示すことも考える。
- ・科目ごとにまとめたものを教科でまとめて綴り、学校の教科としての年間指導計画として位置付ける。
- ・可能な限り、年度当初に作成するよう努める。

3 内容のまとめ(単元)ごとに1単位時間の評価規準を盛り込んだ年間指導計画

年度岩手県立 高等学校 年間指導計画 (科目)					
指導学年	単位数	内容のまとめ(単元名)			
小単元	配当時間	1単位時間の授業における評価規準			
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解

作成のための留意点

- ・年間指導計画 では、科目内の内容のまとめ(単元)ごとに評価規準を示していく。
- ・内容のまとめ(単元)をさらに小単元に分けて、授業時間数とその小単元ごとの評価規準を示して、授業進度が想定できるように記載する。
- ・内容のまとめ(単元)ごとにまとめたものを科目でまとめて綴り、科目としての年間指導計画として位置付ける。
- ・作成初年度は、年度当初に作成が思うように進まないことが予想される。その場合、授業を進めながら作成して、年度末に完成させることも検討する。

【図7】指導に生かす評価を取り入れるための推進試案

## 5 教科ごとの指導と評価の計画

### (1) 国語科の指導と評価の計画

「4 指導に生かす評価に関する推進試案」を受けて、国語科では単元ごとの学習において、学習目標の達成状況を生徒に記録させることによって、授業のねらいを生徒に明確に示すとともに、生徒の理解の実態を把握しながら、授業を改善していくシステムを考えることとする。このシステムを運用するために、年間指導計画に基づいて年間指導計画を【資料1】のように作成する。この年間指導計画に対応させながら、次頁【資料2】のような単元ごとの学習目標の達成状況を生徒が記録する表を作成して授業で活用する。内容は次のとおりである。

ア 単元目標、取り扱う教材名、学習予定期間等の記述

イ 単元目標とそれに対応した学習目標の記述

ウ 学習の前半、後半における学習目標の達成状況を記入する欄

エ 不十分な達成状況の理由を記述する欄

オ 学習に対する関心や意欲を回答する欄

アとイには年間指導計画に基づく学習の目標が記入されている。これによって、生徒は学習全体の流れを理解し、授業で何を学習したらよいかをつかむことが可能になる。

また、ウ、エ、オには生徒の学習状況が具体的に記入されることになる。

生徒による自己評価であり、記述されたことをそのまま生徒の実態とすることはできないが、記録された学習目標の達成状況を授業中の生徒の反応や提出物、さらには小テスト等と付き合わせることによって、生徒がどこでつまづいているのか、どの程度の生徒がおよその理解を示しているのかを判断することができる。このようにして生徒の個々の学習目標の達成状況、生徒全体の達成状況の概要を知ることができれば、授業の進度を修正したり、生徒のつまづきを克服させるための個別指導を効果的に行ったりすることができる。

### 【資料1】年間指導計画（国語総合の例）

年間指導計画 【国語総合】					( )内は時間数	
月	単元名	単元目標	教材	評価規準		評価方法
4 月 中 旬	(古) 古文入門 (6)	ア 古文を読む基礎を学ぶ イ 人物の心情をとらえながら文章を読み味わう ウ 説話における表現の特徴を理解する	1 検非違使忠明、いさかいのこと(2) 2 鳥羽僧正、絵をもって諷すること(1) 3 源頼義、馬盗人を射殺したること(3)	I	・範読を積極的に聞き、言葉を意欲的に調べている	観察・ノート
				S	・歴史的仮名遣いを正しく発音して読んでいる	観察
				W	・教材文を歴史的仮名遣いに留意して正しく表記できる ・五十音図を正しく表記できる ・登場人物の言動に対する感想を的確にまとめている	ノート・課題プリント
				R	・教材文を重要語句や文法に即して正しく口語訳できる ・登場人物の人間関係を的確にとらえている ・登場人物の心情を的確にとらえている	観察・ノート・テスト
				K	・歴史的仮名遣いと現代仮名遣いの違いを理解している ・古語辞典の使い方を理解し、語句調べに活用できる ・文語の用言について、種類と活用を理解している	観察、テスト

(注) I = 関心・意欲・態度、S = 話す・聞く能力、W = 書く能力、R = 読む能力、K = 知識・理解

【資料2】「学習目標の達成状況」記録表

学 習 目 標 の 達 成 状 況				No. 1	
年 組 番 氏名		記載日 前半 ( / ) 後半 ( / )			
学習単元 ・ 説話 (国語総合古典編)		学習期間 月 日 ~ 月 日			
教材名 (時数) ・『検非違使忠明、いさかひのこと』(2) ・『鳥羽僧正、絵をもって諷すること』(1) ・『源頼義、馬盗人を射殺したること』(3)		単元目標 ア 人物の心情を想像力を働かせながら読む イ 人物の心情をとらえながら文章を読み味わう ウ 古典の表現の特色について理解する			
学 習 目 標		前 半	後 半	Cを付けた理由を書きなさい	
A・B・Cで達成状況を記入すること					
ア 人物の心情を想像力を働かせながら読む				例：1 - 「爰」の書き方がわからない	
1	歴史的仮名遣いを正確に読み書きできる			-----	
2	五十音図を読み書きできる			-----	
3	大事な文を理解して読める			-----	
4	文章の構成や展開を踏まえて読める			-----	
5	文末の表現を吟味し、正確な読みができる			-----	
6	古語辞典を利用して読みを深めることができる			-----	
イ 人物の心情をとらえながら文章を読み味わう				-----	
7	登場人物の人間関係を的確にとらえられる			-----	
8	登場人物の心情に共感したり反発したりできる			-----	
ウ 古典の表現の特色について理解する				-----	
9	文語体の特徴を理解して読める			-----	
10	説話の特色について理解できる			-----	
この単元の学習に対する関心度を答えてください		前 半	後 半	Cを付けた理由を書きなさい	
Aとてもある    Bある    Cあまりない					
1	文語体の特徴を理解して正確に古文を音読すること			-----	
2	古語辞典を利用して適切な意味を考えること			-----	
3	人物の心情を想像しながら音読すること			-----	
4	文章の構成や展開を踏まえて音読すること			-----	
5	登場人物の行動や心情に対する意見を書くこと			-----	

(2) 地歴・公民科の指導と評価の計画

学習指導の改善を進めるにあたって、地歴・公民科では、具体的内容について次のように考える。

「知識・理解」を中心とした授業ではなく、生徒の「関心・意欲」を高め、資料活用の「技能・表現」力や、「思考・判断」力を伸ばすように、発問・小テーマの設定・教材の工夫など、あらゆる面で改善を実現し、生徒と教師及び生徒と生徒間の多面的な方向性をもった授業を実現する。

ア 指導と評価の一体化の考え方を理解し、評価が単に生徒の能力を「判定する」のみに終わらず指導に結びつくような授業を実現する。

・その章の自分の学習の理解度を判断する【資料3】のような評価用紙（レーダーチャートなど視覚的に分かりやすいものの導入）を作成し、記入させる。それにより、評価規準を学習の中で意識させ、自分に不足している観点を次に生かす手だてにさせる。

イ 「4 指導に生かす評価に関する推進試案」を受けて、次頁【資料4】に、評価の観点にもとづいた章単位の指導内容を具体的に設定した事例を示した。これは、章単位の事例であるが、各授業毎に作成することもできる。

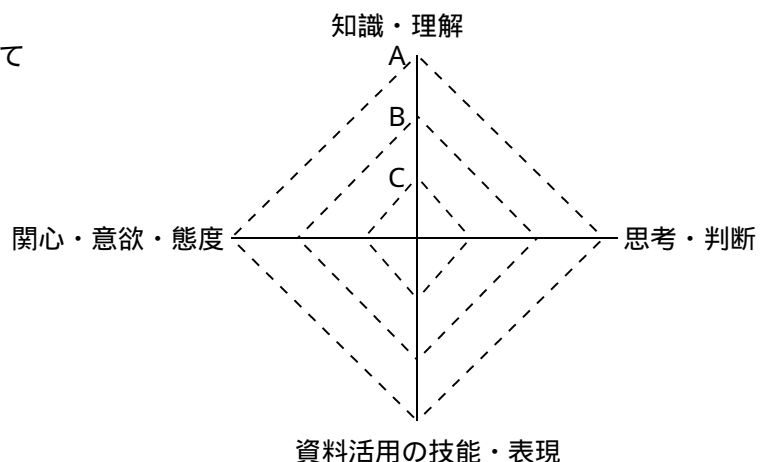
・授業毎に明示する評価規準は、四観点のうち、その教材のもつ特性に配慮し、合致したものを導入する。無理に全ての観点を盛り込まないようにする。

ウ 評価の中に、プリントやレポート提出及び質問紙記入など学習活動の過程を記録、評価できる評価方法を盛り込む。

・レポート提出などの評価の際には、アのような自己評価を取り入れるだけでなく、他の生徒からの評価も文章やレーダーチャートで行わせる。その都度評価する生徒をランダムに入れ替えることで、他の生徒の多くの意見にもふれることができ、人を評価することで自分の学習にも緊張感や学びの深化が生まれる。さらに、内容によっては、教室に一斉に掲示したり、一冊に綴じて回覧させ、多くの意見に触れさせることで相互理解を図らせる。

【資料3】レーダーチャートによる自己評価例

学習終了後に、4つの観点について自己評価してみる。





【資料4】評価記録簿（日本史Bの例）

- 1 ここでは教科書の一章分の評価規準を示した。
- 2 略記号は、それぞれ【関】＝関心・意欲・態度、【思】＝思考、判断、【技】＝技能・表現、【知】＝知識・理解 を意味する。
- 3 【関】・【思】・【技】については、A（十分満足できる）・B（おおむね満足できる）・C（努力を要する）の三段階で評価させる。
- 4 【知】については、小テストを実施する。
- 5 評価方法の【ア】はアンケート、【プ】はプリント提出、【質】は質問用紙、【テ】は小テスト、【観】は行動や発言の観察
- 6 各評価項目は、第4章「武家社会の成立」の以下の4項に対応している。  
第1項）鎌倉幕府の成立、第2項）執権政治、第3項）元寇と幕府の衰退、第4項）鎌倉文化

教科(科目)	日本史B	単元	武家社会の成立	氏名	評価方法	評価
【関】	第1時間目 第4章についてのアンケート				【ア】	
	1項	源平の争乱について知っていることがら			【プ】	
	2項	執権政治について知っていることがら			【プ】	
	3項	元寇について知っていることがら			【プ】	
	4項	鎌倉文化について、一つの事項を調べる			【プ】	
	最終時間目	第4章全体の感想			【プ】	
		授業感想			【ア】	
	発言・机間指導等				【観】	
【思】	1項	なぜ平家は滅んだのか			【プ】	
	1項	封建制度が成立した理由は何か			【プ】	
	2項	「一生懸命」は、元々「一所懸命」と表記されていたことから分かること			【質】	
	2項	幕府支配が全国化していく根拠は何か			【プ】	
	3項	社会の変動はどのような分野でおこったか			【質】	
	3項	元寇は幕府の支配にどのような影響を与えたか			【プ】	
	4項	鎌倉仏教は今までの仏教とどこが異なっているのか（悪人正機説などから）			【プ】	
	4項	武士の生活や気質がどのような新しい文化や美術を生んだのか			【プ】	
	発言・机間指導等				【観】	
	レポート提出) 第4章での歴史的事象1つを選び、もしそれが起きなかったら歴史がどのように変わったかを想定して説明する。テストにも出題し記述させる。				【プ】	
【技】	1項	鎌倉の地図から分かること			【プ】	
	1項	幕府職制図中の機関名の変更から分かること			【プ】	
	2項	北条政子の演説を現代語に書き直し、発表する。			【プ】	
	2項	武士の生活について館と笠懸の絵から推察できること			【質】	
	3項	「蒙古襲来絵巻」の絵から分かること			【プ】	
	3項	「備前国福岡市」の絵から分かること			【質】	
	4項	「踊念仏」の絵から分かること			【質】	
	4項	東大寺南大門などの写真と平安時代の建築物の写真的比較から分かること			【プ】	
	発言・机間指導等				【観】	
【知】	第4章のまとめの小テスト				【テ】	
	第4章のまとめの小テスト				【テ】	

### (3) 数学科の指導と評価の計画

「4 指導に生かす評価に関する推進試案」を受けて、数学科では、1単位時間ごとの評価等にかかわる指導計画を立てて実施し、反省して次の授業に生かしていくシステムを考えることとする。そのシステムを運用するため、次頁【資料5】のような1単位時間ごとの指導計画・評価結果をまとめる表を作成した。内容は次のとおりである。

ア 科目、担当学年、クラス等の記述

イ 当該時間の指導内容等の記述

ウ 評価する観点とその評価規準、評価方法の記述

エ 評価の結果の記述

オ 本時の反省と次時の指導改善の記述

アについては、複数の科目やクラスをもつ場合も想定されるので記載する欄を設けることとした。

イについては、指導する内容を学習指導案のように詳細に記述することも大切であるが、ポイントをおさえて、簡略できることはして継続的に指導計画・評価計画が考えられるように配慮した。なお、より具体的に授業への準備を書き記したい場合は、裏面を利用したり別なノートに記述したりすることを考える。

ウについては、イの指導内容を受けてどこに焦点を当てた評価をするか、重点的に指導する部分はどこかであることを明確にすることをねらいとした。評価する観点は、関心・意欲・態度についてはどの時間でも観察等でみていくこととし、他の三観点のうち一つの観点到重点をおいたものを計画する。その評価規準については、おおむね満足できる状況(B)を記述して、Bよりも優れているものをAとし、Bよりも劣るととらえたものをCとする。

エについては、ウの記述にしたがって授業時間中に評価できた生徒を記載していく。記載は、AとCの生徒のみにし、記載のない生徒はBと判断する。記載は、授業中は書き留める時間もあまりないことから、余裕があれば授業時間中、余裕がないときには、授業後とする。記載する内容も出席番号や後で誰であるかが分かるような記載でよいこととする。また、ペーパーテスト等のように授業後に評価する場合でもこの用紙にA、Cを書き記すこととする。

そして、オについては、Cと評価した生徒がどうしてCとなったか、原因は何であるのか等の気付いた点を記述しておく。ただし、関心・意欲・態度についての評価は、1単位時間ごとには記述しておくが、数単位時間ずつ長い目で見守り変容を見ることを確認しておく。Aの人数が多い場合には、授業が生徒にとって分かりやすいと判断するのか、優しすぎたと判断するのか熟慮する必要がある。反対に、Cの人数が多い場合には、生徒がどの部分が足りなかったのか、教師の指導のどの部分に配慮が欠けていたか等見直しをする記述を書き留めることとする。

このように、ア～オの記述を一枚の用紙に記述することにより、簡潔でかつまとめやすく継続しやすい形で指導と評価を進めていき、内容のまとめごとにより評価をまとめて、さらに次の内容のまとめりの指導に生かしていくシステムとした。

以上の考えを具体的に「数学」式と証明・高次方程式の内容のまとめりで考えた例を別添【補充資料2 - 数学科補充資料1】の学習指導計画をもとに【補充資料2 - 数学科補充資料2】で1単位時間ごとの指導計画・評価等実施結果として作成した例を示した。

**【資料5】 1単位時間ごとの指導計画・評価等実施結果を表す表の例**

科目名 (単位数)	担当学年・クラス 指導生徒数	年 名	組												
指導する内容のまとめり(単元) 本時の指導範囲( 時間中 時間目) 本時の指導目標															
教科書の範囲 P ~ P  副教材(問題集)の使用部分															
特に評価する観点とその評価規準															
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 25%; padding: 5px;">四観点</td> <td style="width: 50%; padding: 5px;">関心・意欲・態度</td> <td style="width: 25%;"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">おおむね満足 できる状況</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>				四観点	関心・意欲・態度		おおむね満足 できる状況								
四観点	関心・意欲・態度														
おおむね満足 できる状況															
評価する方法															
評価の結果															
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th colspan="2" style="padding: 5px;">評価結果</th> <th style="padding: 5px;">十分満足できる状況(A)</th> <th style="padding: 5px;">努力を要する状況(C)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="width: 5%; padding: 5px; text-align: center;">評 価 の 観 点</td> <td style="padding: 5px;">関心・意欲・態度</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>				評価結果		十分満足できる状況(A)	努力を要する状況(C)	評 価 の 観 点	関心・意欲・態度						
評価結果		十分満足できる状況(A)	努力を要する状況(C)												
評 価 の 観 点	関心・意欲・態度														
Cと評価した生徒の原因、事後指導の計画															
次時への指導改善のポイント															

(4) 外国語科の指導と評価の計画

ア 「英語力の目標」の設定

外国語科では、平成15年3月の「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」の策定に伴い、平成15年度から、高等学校において育成すべき英語力の目標を明らかにした上で、生徒の英語力を多面的に評価し、評価の結果を日々の指導に生かしながら学習意欲を高める方策の研究に取り組んできた。

第1年次の研究成果は、各種先行研究、英国のナショナルカリキュラム、研究協力校での実態調査によって得た資料に基づき、想定される生徒のパフォーマンスを位置付けた、高等学校の「英語力の発達の見通し」の作成ができたことである。

今年度は、「英語力発達の見通し」を発展させ、ナショナルカリキュラムの9つのレベルと、英語検定や各種入学試験問題との関係を明らかにし、【資料6】のような「英語力の目安」を設定し、四技能別に「英語力の目標」を作成した。

【資料6】英語力の目標

各レベルと英語力の目安						
	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	英検・語彙数	入試問題
レ	習った単語を正しき聞き分ける	見たものを習った単語レベルで描写する	習った単語を読んで理解する	習った単語を正確に書き写す	200語	高 校 入 試  セ ン タ ー 次 国 公 二 次 標準 難関
レ	習った文を聞き分けて理解する	見たものを簡単に述べ、決まり文句が使える	習った単語を音読でき、短い文を理解する	短い文を正確に書き写す	5級 600語	
レ	簡単なあいさつや自己紹介などを聞き取れる	簡単な自己紹介や日常のあいさつをする	短い文章の要点を読み取り、辞書などを用いる	正しい文字の使い方がわかり、簡単な手紙を書く	4級 1300語	
レ	道案内や日常に関する伝言を聞き取る	他人の紹介をし、簡単な道案内をする	簡単な手紙や掲示板、説明書を読み取る	簡単な日記を書いたり、日常の描写をする	3級 2100語	
レ	日常的なことについての電話の内容を聞き取る	自分のことを電話で伝え、簡単な報告をする	簡単な新聞記事やパンフレットを読んで理解する	日常の体験や予定などを簡単に説明する	準2級 3600語	
レ	やや抽象的な説明や事務的な電話内容を聞き取る	一般の事柄について説明し、簡単な通訳をする	簡単な小説や興味ある分野の記事を読み取る	趣味などの事柄を説明的にやや長い文章で書く	2級 5100語	
レ	テレビ・ラジオなど放送・報道の概要を理解する	社会的出来事の概要を説明し、幅広く通訳をする	幅広く読書し、新聞や辞典の情報を的確に捉える	会議の記録をとり、自分の見解の概要を書き表す	準1級 7500語	
レ	各種放送や演説・討議などを十分理解する	通訳や電話での折衝をし、報道内容を的確に伝える	新聞、雑誌、一般文献などに十分に理解する	自分の意思、見解や演説原稿を十分に書き表す	1級 1万~1.5万	
レ	あらゆる英語を十分に聞いて理解する	あらゆる場面で正確かつ適切に話す	専門書を含め英語を読むことに不自由しない	適切な文体や専門用語を駆使して書く	1.5万~	

イ 評価を位置付けた授業実践と授業実践の分析

生徒の英語力育成のために、「英語力の目標」による英語力の判定を行い、昨年度作成した試案に基づき、「英語力の判定」を受けて、「評価のフィードバック」という手だてにより三か月にわたって授業実践を行った。

授業実践の分析は、「英語力の判定」の結果を用いての事前・事後の到達度の比較、教科指導者と生徒への調査紙による意識調査の分析によって行う。

評価の活動は、基本的に単元ごとに、生徒による自己評価と相互評価（三段階の数値評価）、教科担当者による評価（三段階の数値評価とコメント）で行い、生徒は、反省と次回への目標とともに評価結果を一覧表に記録し、常に意欲と目標を持って学習できる姿勢を維持できるようにする。次頁の【資料7】は単元ごとの評価表、【資料8】はその記録表である。

なお、授業実践と授業実践の分析の詳細は、「高等学校の学習指導の改善に関する研究」と題して、別途、平成16年度（第48回）岩手県教育研究発表会資料（外国語）に掲載する。

【資料7】 単元ごとの評価表

<b>英語活動評価表</b>					
実施日： 月 日		年 組 番 氏名			
項目	評価項目	自己評価	相互評価	教科担任評価とコメント	
聞 く こ と	・聞いた内容の要点を理解する	3 2 1	3 2 1	3 2 1	
	・関心を持って相手を見て話を聞く	3 2 1	3 2 1		
	・理解できない部分も推測して聞く	3 2 1	3 2 1		
	[ 評価の平均 ]				
話 す こ と	・間違いを恐れず自分の考えを話す	3 2 1	3 2 1		
	・学んだ表現を進んで使って話す	3 2 1	3 2 1		
	・正しい文法やリズムで話す	3 2 1	3 2 1		
	[ 評価の平均 ]				
読 む こ と	・正しい発音で音読や暗唱をする	3 2 1	3 2 1		3 2 1
	・必要に応じて辞書を活用して読む	3 2 1	3 2 1		
	・理解できない部分を推測して読む	3 2 1	3 2 1		
	[ 評価の平均 ]				
書 く こ と	・間違いを恐れず自分の考えを書く	3 2 1	3 2 1		
	・学んだ表現を用い辞書も活用して書く	3 2 1	3 2 1		
	・書いたものを読み直したり書き直す	3 2 1	3 2 1		
	[ 評価の平均 ]				

\* 評価の判断基準は [ 3 ] どちらかといえればできた  
[ 2 ] どちらともいえない  
[ 1 ] どちらかといえればできなかった

【資料8】 評価記録表

<b>英語活動評価記録表</b>								
年 組 番 氏名								
実施日	項目	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	教科担任	今回の反省と次回までの目標	検 印
	自己							
	相互							
	自己							
	相互							
	自己							
	相互							
	自己							
	相互							

\* 返却後各項目の平均を記入し、各自保管する。

## 6 高等学校の学習指導の改善に関する研究のまとめ

これまで、高等学校の学習指導に関する推進構想に基づき、指導に生かす評価に関する推進試案を作成し、それに基づき、教科ごとの指導と評価の計画を作成してきた。そこで、今年度明らかになったことについて、成果と課題をまとめる。

### (1) 成果

ア 学習指導の改善に関する国や県などの基本的な考え方を整理することができた。

イ 県内の高等学校教員の評価に関する意識や実態を把握することができた。

ウ アとイを整理・把握することにより、高等学校の学習指導に関する推進構想の立案とその推進試案の作成をすることができた。

エ 国語科、地歴・公民科、数学科、外国語科での指導と評価の計画を作成することができた。

### (2) 課題

各教科の具体的な年間指導計画 ・ ・ の作成例を示し、1単位時間ごとの指導と評価の在り方を授業実践をとおして明らかにすること。

以上のことから、課題は残るものの、高等学校の学習指導において、指導に生かす評価を工夫し、学習指導の過程における評価を意図的に進めることにより、指導改善に役立てることができるという見通しを持つことができた。

## 研究のまとめ

### 1 研究の成果

この研究は指導に生かす評価を工夫し、学習指導の過程における評価を意図的に進めることにより、高等学校の学習指導の在り方を明らかにし、指導の改善に役立てようとするものである。

そこで、実態調査を行い、その分析に基づいて推進構想を立案した。さらに、目標に準拠した評価を取り入れるための推進試案を作成し、それに基づいて指導と評価の計画を教科ごとに作成することができた。

### 2 今後の課題

教科ごとの指導と評価の計画が学習指導の改善に実践的に機能するように、教科の特性に応じた工夫・改善をさらに進めることが課題と考える。

## <おわりに>

この研究を進めるに当たり、ご協力いただきました研究協力校の先生方に心からお礼申し上げます。また、研究協力員としてご協力いただきました先生方に心から感謝申し上げます。

## 【引用文献】

岩手県教育委員会高等学校教育質疑応答集（第35集）（2003）、「学校教育指導指針」, pp.29 - 42

## 【参考文献】

梶田叡一（2004）,『絶対評価 目標準拠評価 とは何か』, 小学館

梶田叡一（1983）,『教育評価』, 有斐閣双書

金谷 憲（2003）,『英語教育評価論』, 河源社

北尾倫彦・祇園全祿編（2002）,『観点別学習状況の新評価基準表』, 図書文化社

今野喜清他編（2003）,『学校教育辞典』, 教育出版

静岡県教育委員会高校教育課（2001）,『魅力ある授業づくり』

渋谷憲一（2003）,『教育評価の基礎』, 教育出版

根本 博（2004）,『数学教育の挑戦』, 東洋館出版社

## 【参考Webページ】

国立教育政策研究所 <http://www.nier.go.jp/kaihatsu/kou-sankousiryoku/html/index.htm>

岐阜県総合教育センター <http://www.gifu-net.ed.jp/gec/>

## 【補充資料】

### 《目 次》

【補充資料 1】年間指導計画	の作成例.....	資 1
【補充資料 2】数学科補充資料.....		資 4

【補充資料 1 - 1】年間指導計画 の作成例

年度 岩手県立 高等学校 年間指導計画

教科	目 標
数 学	数学における基本的な概念や原理・法則の理解を深め、事象を数学的に考察し処理する能力を高め、数学的活動を通して創造性の基礎を培うとともに、数学的な見方や考え方の良さを認識し、それらを積極的に活用する態度を育てる。

評価規準

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
数学的活動を通して、数学の論理や体系に関心を持つとともに、数学的な考え方のよさを認識し、それらを事象の考察に積極的に活用しようとしている。	数学的活動を通して、数学的な見方や考え方を身に付け事象を数学にとらえ、論理的に考えとともに思考の過程を振り返り、多面的・発展的に考える。	事象を数学的に考察し、表現し処理する仕方や推論の方法を身に付け、よりよく問題を解決する。	数学における基本的な概念、原理・法則、用語・記号などを理解し、知識を身に付ける。

各学年での指導科目と目標

< 1 学年 >

科 目	単位数	科目の目標	備 考
数学	3	方程式と不等式、二次関数及び図形と計量について理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、それらを的確に活用する能力を伸ばすとともに、数学的な見方や考え方のよさを認識できるようにする。	全員必修
数学 A	2	平面図形、集合と論理及び場合の数と確率について理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察し処理する能力を育てるとともに、数学的な見方や考え方のよさを認識できるようにする。	普通科 A コース必修、B コースは選択

< 2 学年 >

科 目	単位数	科目の目標	備 考
数学	4	式と証明・高次方程式、図形と方程式、いろいろな関数及び微分・積分の考えについて理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察し処理する能力を伸ばすとともに、それらを活用する態度を育てる。	普通科 A コース必修
数学 B	2	数列、ベクトル、統計または数値計算について理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察し処理する能力を伸ばすとともに、それらを活用する態度を育てる。	普通科 A コース必修

< 3 学年 >

科 目	単位数	科目の目標	備 考
数学	3	極限、微分法及び積分法についての理解を深め、知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察し処理する能力を伸ばすとともに、それらを積極的に活用する態度を育てる。	普通科理系コース選択
数学 C	2	行列とその応用、式と曲線、確率分布または統計処理について理解させ、知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察し処理する能力を伸ばすとともに、それらを積極的に活用する態度を育てる。	普通科理系コース選択



【補充資料 1 - 2】年間指導計画 の作成例

年度 岩手県立 高等学校 年間指導計画 (教科 数学)				
科目・単位数・学年	目 標			
数学 3 単位 1 学年	方程式と不等式、二次関数及び図形と計量について理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、それらを的確に活用する能力を伸ばすとともに、数学的な見方や考え方のよさを認識できるようにする。			
使用教科書	使用副教材			
評価規準				
関心・意欲・態度 数学的活動を通して、方程式と不等式、二次関数及び図形と計量における考え方に関心をもつとともに、数学的な見方や考え方のよさを認識し、それらを事象の考察に活用しようとする。	数学的な見方・考え方 数学的活動を通して、方程式と不等式、二次関数及び図形と計量における数学的な見方や考え方を身に付け、事象を数学的にとらえ、論理的に考え、思考の過程を振り返り、多面的・発展的に考える。	表現・処理 方程式と不等式、二次関数及び図形と計量において、事象を数学的に考察し、表現し処理する仕方、推論の方法を身に付け、的確に問題を解決する。	知識・理解 方程式と不等式、二次関数及び図形と計量における基本的な概念、原理・法則、用語・記号などを理解し、基礎的な知識を身に付けている。	
内容のまとめ(単元)ごとの内容と評価規準				
内容のまとめ(単元)(1) 方程式と不等式				
内 容	数を実数まで拡張することの意義を理解し、式の見方を豊かにするとともに、一次不等式及び二次方程式についての理解を深め、それらを活用できるようにする。			
評価の観点	関心・意欲・態度	数学的な見方・考え方	表現・処理	知識・理解
指導予定 時間数 3 5 時間	数と式、一次不等式、二次方程式に関心をもつとともに、それらを問題の解決に活用しようとしている。	数の範囲を拡張するとともに、式の見方を豊かにし、方程式と不等式について数学的に考察することができる。	簡単な無理数の計算をしたり、数量の関係を式に表現して的確に処理したりすることができる。	数と式、一次不等式、二次方程式における基本的な概念、原理・法則、用語・記号などを理解し、基礎的な知識を身に付けている。
内容のまとめ(単元)(2) 二次関数				
内 容	二次関数について理解し、関数を用いて数量の変化を表現することの有用性を認識するとともに、それを具体的な事象の考察や二次不等式を解くことなどに活用できるようにする。			
評価の観点	関心・意欲・態度	数学的な見方・考え方	表現・処理	知識・理解
指導予定 時間数 3 5 時間	二次関数とそのグラフや値の変化に関心をもつとともに、関数を用いて数量の変化を表現することの有用性を認識し、二次関数を活用しようとする。	関数的な見方や考え方を身に付け、具体的な事象について関数を用いて考察することができる。	関数を用いて数量の変化を表現し、関数の値の変化を調べることができる。	二次関数とそのグラフ及び関数の値の変化における基本的な概念、原理・法則、用語・記号などを理解し、基礎的な知識を身に付けている。
内容のまとめ(単元)(3) 図形と計量				
内 容	直角三角形における三角比の意味、それを鈍角まで拡張する意義及び図形の計量の基本的な性質について理解し、角の大きさなどを用いた計量の考えの有用性を認識するとともに、それらを具体的な事象の考察に活用できるようにする。			
評価の観点	関心・意欲・態度	数学的な見方・考え方	表現・処理	知識・理解
指導予定 時間数 3 5 時間	角の大きさなどを用いた計量に関心をもつとともに、それらの有用性を認識し、具体的な事象の考察に活用しようとする。	角の大きさなどを用いた計量を行うための数学的な見方や考え方を身に付け、具体的な事象を考察することができる。	具体的な事象の数量の関係を三角比などを用いて表現し、図形の様々な計量を行うことができる。	直角三角形における三角比の意味、三角比を鈍角まで拡張する意義及び図形の計量の基本的な性質を理解し、基礎的な知識を身に付けている。

【補充資料1 - 3】年間指導計画 の作成例

年度 岩手県立 高等学校 年間指導計画 (科目 数学)		内容のまとめり(単元)			
指導学年	単位数	(1) 方程式と不等式			
1 学年	3	1 単位時間の授業における評価規準			
小単元	配当時間	関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
数と式	1 2	<p>(ア) 数の体系を実数まで拡張するとともに、数を拡張していく過程に関心をもち、調べようとする。</p> <p>(イ) 式の展開や因数分解などに関心をもち、目的に応じて式の変形をしようとしている。</p> <p>(ウ) 具体的な事象の考察に式の展開や因数分解などを活用しようとしている。</p>	<p>(ア) 数を拡張してきた過程を考察することができる。</p> <p>(イ) 数の四則演算の可能性について考察することができる。</p> <p>(ウ) 一つの文字に着目したり、一つの文字に置き換えたりするなどして、いろいろな式の見方をするすることができる。</p> <p>(エ) 目的に応じて、的確に式を変形する方法を考察することができる。</p>	<p>(ア) 簡単な無理数についての四則計算ができる。</p> <p>(イ) 式を用いて事象を適切に表現することができる。</p> <p>(ウ) 見通しをもって式を扱うことができる。</p> <p>(エ) 乗法公式や因数分解の公式などを用いて、式を目的に応じて変形することができる。</p>	<p>(ア) 数を実数まで拡張することの意義を理解している。</p> <p>(イ) 実数が直線上の点と1対1に対応していることを理解している。</p> <p>(ウ) 乗法公式や因数分解の公式の意味を理解している。</p> <p>(エ) 複雑な式が簡単な式に帰着できることを理解している。</p>
一次不等式	5	<p>(ア) 数量の関係を不等式で表すことよさをとらえようとしている。</p>	<p>(ア) 一次不等式の解について、数直線と対比したり、いろいろな数値を代入したりして考察することができる。</p> <p>(イ) 不等号の性質を等号の性質と対比してとらえることができる。</p> <p>(ウ) 不等式の性質を基にして、一次不等式の解き方を考察することができる。</p>	<p>(ア) 数量の関係を一次不等式で表すことができる。</p> <p>(イ) 不等式の性質を基にして、一次不等式を解くことができる。</p> <p>(ウ) 一次不等式の解を数直線上に表すことができる。</p>	<p>(ア) 不等式の中に含まれている文字の意味を理解している。</p> <p>(イ) 不等式の性質を理解している。</p> <p>(ウ) 一次不等式とその解の意味を理解し、解を求めるための基礎的な知識を身に付けている。</p>
二次方程式		<p>(ア) 一定の手続きで二次方程式の解を求めることよさをとらえようとしている。</p> <p>(イ) 具体的な事象の考察に二次方程式を活用しようとしている。</p>	<p>(ア) 平方根の考えを基に、二次方程式の解の公式を導き出す過程を考察することができる。</p>	<p>(ア) 因数分解を利用して二次方程式を解くことができる。</p> <p>(イ) 平方の形に変形して二次方程式を解くことができる。</p> <p>(ウ) 解の公式を用いて実数解をもつ二次方程式を解くことができる。</p>	<p>(ア) 二次方程式とその解の意味を理解し、解の求め方についての基礎的な知識を身に付けている。</p>

【補充資料2 - 数学科補充資料1】数学科「数学」における年間指導計画の例

平成 年度 岩手県立 高等学校 年間指導計画 (科目 数学)

NO. 1

指導学年	単位数	内容のまとめり(単元)		使用教科書	
2	4	式と証明・高次方程式		出版社「数学」	
小単元	配当時間	1 単位時間の授業における評価規準			
		関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
式と計算	2	(ア) 多項式の割り算に興味を示し、具体的な問題に取り組もうとする。	(ア) 多項式の割り算の結果を等式で表して考えることができる。	(ア) 多項式の割り算の結果を等式で表し、利用することができる。	(ア) 多項式の割り算の計算方法を理解している。 (イ) 割り算の等式の意味を理解している。
	2	(イ) 分数式の四則計算の仕方に興味をもち、意欲的にその計算に取り組もうとしている。	(イ) 分数式を分数の四則計算のように考察することができる。	(イ) 2次以上の多項式を因数分解等することにより計算することができる。その結果を既約分数式または多項式として表すことができる。	(ウ) 分数式は2つの多項式A、Bが $\frac{A}{B}$ の形で表されることを理解し、計算結果は、既約分数または多項式の形とすることを理解している。
	3	(ウ) 恒等式の具体的な問題に意欲的に取り組もうとしている。	(ウ) どの文字についての恒等式であるかを考察することができる。 (I) 係数比較法と数値代入法と比較して恒等式を考察することができる。	(ウ) 文字を整理して係数を比較することで未定係数を決定することができる。 (I) 分数式の恒等式は分母を払った多項式の恒等式として利用することができる。	(I) 方程式との違いをおさえて、恒等式の意味を理解している。
等式・不等式の証明	4	(ア) 等式、不等式の証明をとおして、数学の論証に興味・関心をもち、考察しようとしている。	(ア) 恒等式 $A = B$ の証明を $A - B = 0$ の利用と考えることができる。 (イ) 条件付きの証明の仕方を知ることができる。	(ア) 恒等式 $A = B$ の証明、条件付きの等式の証明を適切な方法で行うことができる。	(ア) 等式の証明の意味を理解している。

小単元	配 当 時 間	1 単位時間の授業における評価規準			
		関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
	5		(ウ) AとBの大きさをA - Bの符号から考察することができる。	(イ) 実数の大小関係の基本性質を利用して不等式を証明することができる。	(イ) 不等式の証明の意味を、理解している。 (ウ) 相加・相乗平均の大小関係を理解している。
複素数と方程式の解	2	(ア) 2次方程式が常に解を持つように考えられた複素数に興味・関心を示し、意欲的にその計算に取り組もうとしている。	(ア) $i^2 = -1$ となる新しい数 <i>i</i> について考えることができる。	(ア) 複素数の四則計算が手際よく正確にできる。 (イ) 負の数の平方根を <i>i</i> を用いて表し処理することができる。	(ア) 複素数、複素数の相等の定義を理解している。 (イ) 複素数の四則計算の仕方を理解している。 (ウ) 負の数の平方根の意味を理解している。
	6	(イ) 2次方程式の解の種類と判別式、解と係数の関係に興味・関心をもち、それを積極的に用いて問題に取り組もうとしている。	(イ) 2次方程式の解の公式の有用性を考えることができる。 (ウ) 2次方程式の解について、実際に解を求めずに判別式で解の種類を確認できることを理解している。 (イ) 2次方程式の解について実際に解を求めずに、 $+、$ の値が得られることを理解できる。	(ウ) 解の公式を用いて、2次方程式を解くことができる。 (イ) 判別式Dを用いて2次方程式の解の種類を判別できる。 (オ) 2次方程式の2つの解、 $+、$ を利用した対称式の値を $+、$ の形に変形して求めることができる。 (カ) $+、$ を解とする2次方程式の式決定をすることができる。	(イ) 2次方程式の解の公式の導き方を、理解している。 (オ) 2次方程式の解の種類と判別式Dの符号の関係を、理解している。 (キ) 2次方程式の解と係数の関係の意味を理解している。

小単元	配 当 時 間	1 単位時間の授業における評価規準			
		関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
				(キ) 2次方程式の解の符号に関する問題を解と係数の関係を利用して求めることができる。	
高次方程式	6	(ア) 剰余の定理、因数定理に関心をもち積極的に高次方程式を解こうとしている。	(ア) 多項式 $P(x)$ を $x - k$ で割った余りは、 $P(k)$ となることを考えることができる。  (イ) 高次方程式の解法が因数分解の公式の利用と因数定理の利用の2通りで考えることができる。	(ア) 剰余の定理を用いて一次式で割った余りを求めることができる。 (イ) 剰余の定理を利用して、因数分解できる多項式で割った余りを求めることができる。 (ウ) 因数定理を利用して、高次方程式を解くことができる。 (オ) 高次方程式が虚数解をもつときの係数や他の解を求めることができる。	(ア) 剰余の定理の意味を理解している。          (イ) 因数定理の意味を、理解している。

【補充資料 2 - 数学科補充資料 2 - 1】 1 単位時間ごとの指導計画・評価等実施結果を表す表の例 1

科目名 数学 (単位数) 4	担当学年・クラス 指導生徒数	2 年 組 40 名	
指導する内容のまとめり(単元) 式と証明・高次方程式 本時の指導範囲(30時間中 1 時間目) 本時の指導目標 多項式と整数の割り算(筆算)の仕方が似ていることに気づき、多項式の割り算の商と余りを求めることができる。			
教科書の範囲 P 8 ~ P 1 0  副教材(問題集)の使用部分 本時間は使用しない			
特に評価する観点とその評価規準			
	四観点	関心・意欲・態度	知識・理解
	おおむね満足できる状況	(ア)多項式の割り算に興味を示し具体的な問題に取り組もうとする。	(ア)多項式の割り算の計算方法を理解している。
評価する方法 関心・意欲・態度...観察法(机間指導等で生徒の様子を観察する) 知識・理解.....テスト法(授業の終わりに5分程度の小テストの結果をみる)			
評価の結果			
	評価結果	十分満足できる状況(A)	努力を要する状況(C)
評価の観点	関心・意欲・態度	P子	Q男
	知識・理解	R男	S子、T男
Cと評価した生徒の原因、事後指導の計画 ・Q男は前時間は欠席した。その影響もありそうなので、数時間様子を見たい。 ・S子、T男とも降べきの順に整理していない。次の時間の始めに復習確認して強調したい。			
次時への指導改善のポイント ・強調したつもりであるが、 $3x^3 - 2x + 1$ のように、途中の $x^2$ の係数が0のであるときは、その次数の分はスペースをつくり筆算することを強調したい。			

【補充資料 2 - 数学科補充資料 2 - 2】 1 単位時間ごとの指導計画・評価等実施結果を表す表の例 2

科目名 数学 (単位数) 4	担当学年・クラス 指導生徒数	2 年 組 40 名	
指導する内容のまとめり(単元) 式と証明・高次方程式 本時の指導範囲(30時間中 2 時間目) 本時の指導目標 多項式の割り算の意味を理解し、割り算の結果を等式で表すことを考えることができる。			
教科書の範囲 P10 ~ P10  副教材(問題集)の使用部分 教師作成プリントを使用			
特に評価する観点とその評価規準			
	四観点	関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方
	おおむね満足 できる状況	(ア)多項式の割り算に興味を示し 具体的な問題に取り組もうと する。	(ア)多項式の割り算の結果を等式 で表して考えることができる。
評価する方法 関心・意欲・態度.....観察法(机間指導等で生徒の様子を観察する) 数学的な見方や考え方...観察法(発言、発表から) テスト法(授業の終わりに5分程度の小 テストの結果をみる)			
評価の結果			
	評価結果	十分満足できる状況(A)	努力を要する状況(C)
評 価 の 観 点	関心・意欲・態度	P子	Q男
	数学的な見方や考 え方	R男	S子、T男
Cと評価した生徒の原因、事後指導の計画 ・Q男は前時間もCであった。もう少し様子をみたい。 ・S子、T男とも割る式と割られる式を反対に取り違えていた。割る式と割られる式の次数にも注目させて気付かせたい。 次時への指導改善のポイント ・次の時間は分数式へ入っていくが、今日の授業は剰余の定理・因数定理につながるころであるので、次の時間でも復習としてふれていきたい。			

【補充資料 2 - 数学科補充資料 2 - 3】 1 単位時間ごとの指導計画・評価等実施結果を表す表の例 3

科目名 数学 (単位数) 4	担当学年・クラス 指導生徒数	2 年 組 40 名	
指導する内容のまとめ(単元) 式と証明・高次方程式 本時の指導範囲(30時間中 3 時間目) 本時の指導目標 分数式の乗法・除法の意味を理解し、既約分数式に結果を表すことができる。			
教科書の範囲 P 1 1 ~ P 1 2  副教材(問題集)の使用部分 教師作成プリントを使用			
特に評価する観点とその評価規準			
	四観点	関心・意欲・態度	表現・処理
	おおむね満足 できる状況	(イ) 分数式の四則計算の仕方に興味をもち、意欲的にその計算に取り組もうとしている。	(イ) 2 次以上の多項式を因数分解等することにより計算することができ、その結果を既約分数式または多項式として表すことができる。
評価する方法 関心・意欲・態度.....観察法(机間指導等で生徒の様子を観察する) 表現・処理.....観察法(演習問題を机間指導しながら様子を見る)			
評価の結果			
	評価結果	十分満足できる状況(A)	努力を要する状況(C)
評価の観点	関心・意欲・態度	P子	Q男
	表現・処理	U男	V子、W男
C と評価した生徒の原因、事後指導の計画 ・ Q男は前の時間もCであった。もう少し様子を見たい。 ・ V子、W男とも÷を×に直すとき分母、分子を変えずに計算していた。逆数にすることを強調して指導していきたい。 次時への指導改善のポイント ・ 次の時間は分数式の加減へ入っていくが、通分するとき分母の因数分解が大切になるので強調して指導していきたい。			